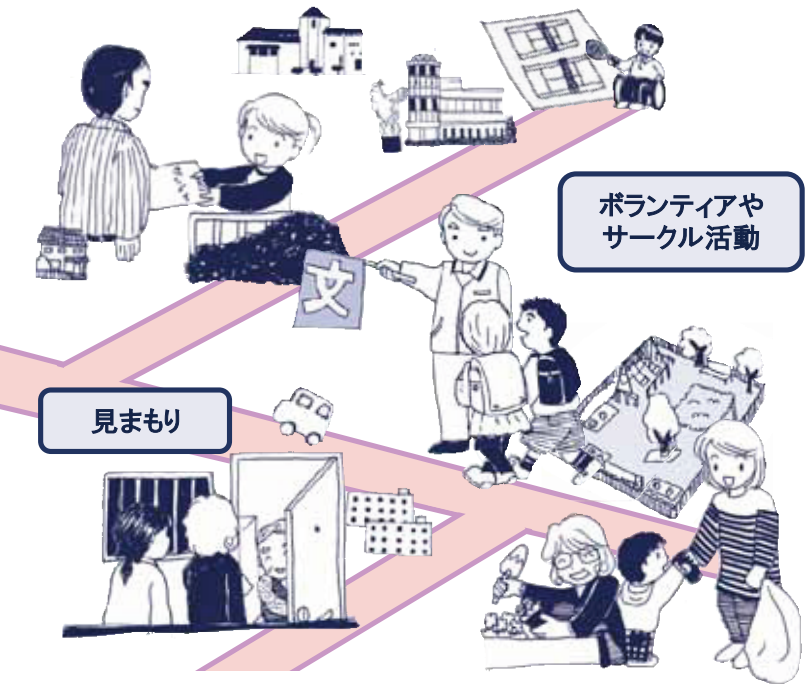
災害時に生きる力につながります

●地域のつながりやネットワークで防災力アップ！



あなたの地域で防災のワークをしてみよう！

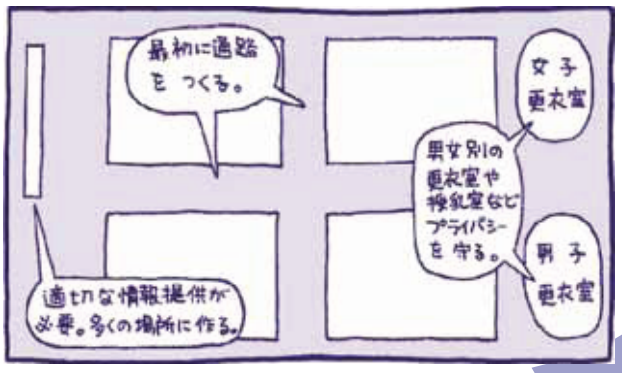
防災マップを地域で作ることで、地域の危険なところを具体的に見つけることができます。また、一緒に作った人の顔が見えるようになります。防災を考えながら、同時にコミュニティづくりにも役立ちます。

≪その他≫

クロスロードゲーム・避難所運営ゲームなど

「通路・更衣室・掲示板」は避難所の三種の神器

人の多様性に配慮した避難所運営を考えます。女性も運営にかかわります。



持ちつ持たれつお互いさま

松藤 聖一さん

（ＮＰＯ法人こむの事業所代表理事）

船や飛行機が遭難して救命いかだに退避するとき、子ども、お年寄り、病気や障害のある人、を優先して、力のある壮健な人が避難を手助けします。大きな災害に遭ったとき、私たちは、市役所が決めた避難所に避難するのではなく、すべての住民を守るための避難所と名付けられた救命いかだに避難することなのですね。

そこでは水や食料を分かち合って命をつなぎますが、体力の弱い人を優先します。飲んだり食べたりができにくい人をサポートします。歌の得意な人は歌ってみんなを励まし、お話の好きなひとは、みんなの心にある言葉を紡いで、心を一つにします。お互い様、みんな自分ができることを誰かのために使います。そしてみんなで暮らしを再生していきます。

持続可能な社会、様々な困難に遭っても生き延びることのできる社会は、誰一人として失うことがない地域社会、誰もが自分の持つ力を、必要とする誰かのために発揮する、お互い様の地域社会に他ありません。そこでは子ども、お年寄り、病気や障害のある人こそ、内からこみあげてくる力、エンパワメントが湧き出てくる支援がなされることになります。

とんでもない災害に遭遇したとき「揺れてるどないしょ!!」「よっしゃ、みんなで助かろう!!」そんな掛け声をあげたいですね。

災害時の女性への暴力をふせぐために

正井 礼子さん

（NPO 法人女性と子ども支援センター ウィメンズネット・こうべ 代表理事）

1995 年の阪神・淡路大震災直後に女性支援ネットワークをたちあげ、女性のための電話相談を開設したが、当時、相談の6割はDVだった。相談者の多くが「皆さんが被災して大変なときに、こんな家庭内のつまらない揉め事を相談する私はわがままでしょうか？」と言われた。避難所での性被害に対して、避難所責任者は「加害者も被害者だ。大目に見て欲しい」と言った。仮設住宅で隣人からの性被害を経験した女性が「そこでしか生きていけないときに、我慢するしかない」と言われたことなどが心に残っている。

昨年の3．11の災害発生後、東日本大震災女性支援ネットワークに関わっているが、「災害・復興時における女性と子どもへの暴力」被害調査として「対価型セクシュアル・ハラスメント」が報告されている。津波で夫や家を失った女性に食料や住居を提供する対価として性行為を強要するなどである。市街地や避難所、仮設住宅周辺での性被害も報告され、仮設住宅でのDV殺人も起きている。災害時の女性への暴力防止には①避難所や仮設住宅などの運営に女性が参画していること②男女を問わず被災者の支援にあたる人々がDV や性暴力防止研修を受けることなどが必要である。